氏　　名	古市　友子
学　　位	博士（中国言語文化学）
学位記番号	
学位授与年月日	
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	近代日本における中国語教育に関する総合研究 －宮島大八の中国語教育を中心に－
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　瀬戸口　律子
	（副査）大東文化大学教授　丁　鋒
	（副査）大東文化大学教授　管　寧
	（副査）関西大学教授　内田　慶市

博士論文　審査報告

題目：近代日本における中国語教育に関する綜合研究

－宮島大八の中国語教育を中心に－

宮島大八（1867-1943）は近代日本における中国語教育に不滅の足跡を残した。宮島の著した『官話急就篇』（1904年）や『急就篇』（1933年）等の中国語教本を研究材料とする論文は、これまで那須清氏その他の研究者によって発表されている。単なる言語研究の枠を超え、当時の日・中における社会状況を色濃く反映する宮島の教本が、日本の中国語教育に及ぼした影響は計り知れない。しかし、これまでの先行研究は、宮島の代表作を対象とする語彙・語法の研究あるいは一連の教本の内容についての比較研究がその大部分を占めていた。一方、古市友子氏の研究は、教本の詳細な言語分析と考察に止まらずこれまで触れられることのなかった宮島の思想背景を独自の視点から取り上げて論じている。その切り口から宮島の中国語教育に対する基本姿勢を明らかにしようとする試みである。

本論文は、研究の目的、意義、範囲や方法について述べた序章に続き、第一章では「明治期の中国語教育」、第二章「宮島大八の中国語教育」、第三章「宮島大八の思想背景」、第四章「結論」という構成になっている。

第一章は五節に分かれ、「漢語学所とその教育」、「東京外国語学校」、「民間の中国語教育」、「

宮島大八が受けた中国語教育」、「明治期の中国語教育の目的」が各節のテーマである。明治期の外務省主導による公的外国語教育機関「漢語学所」から始まる中国語教育の進展と社会への広がり、及び教育内容の転換（南京官話から北京官話へ）という当時の情況が外務省・文部省等の公開資料に基づいて分かり易く整理されている。宮島大八が学んだ明治期の中国語教育の全体像を浮かび上がらせるのがその狙いである。そして、第五節「明治期の中国語教育の目的」で、明治期の中国語教育を(1)漢文教育の補填、(2)通弁養成、(3)アジア主義による人材育成、(4)商業・貿易の振興という4つの目的に分類し、この章を総括している。

第二章は、中国語教育に対する宮島の思想に迫るアプローチ篇である。第一節「学校教育」では、清国留学から帰国した宮島が帝国大学や東京外国語学校で中国語教師を務めた時の教育内容、教本、さらに宮島が設立した詠帰舎・善隣書院の紹介であり、第二節「同時代の中国語教本」では宮島が影響を受けたとされる『語言自邇集』と廣部精の教本、宮島が採用した『日刊英語言合璧』、『生財大道』、『談論新編』、『官話指南』が解説されている。そして第三節「宮島大八の中国語教本」では、宮島が編んだ教本についての詳細な分析である。特に『官話急就篇』と『急就篇』については、「単語」と「問答」についてその語彙を比較し、その結果①時代の流れによる名詞の変化、②規範的な表現への訂正、③文語的表現への訂正や故事の追加、④教養的内容の充実、という結論を導き出している。中国の伝統文化を日本に伝えたいという宮島の思いが見て取れるという指摘も明快である。その他、これまで注視されなかった宮島の教本『官話輯要』、『支那語独習書』、『官話篇』、『支那語会話篇』についても内容を整理し、そこから宮島の教育思想を引き出している。

第三章では、宮島に影響を及ぼしたと思われる人々、及び宮島の政治活動を通して、その思想的背景を明らかにしている。第一節「宮島大八に影響を与えた人々」では、父誠一郎、勝海舟、張裕釗や友人たちとの関わりを述べ、第二節「宮島大八の中国観と政治活動」では宮島大八が関わったさまざまな政治活動に焦点が当てられている。乙未同志会、一水会、老荘会、「人種差別撤廃案」、満州国との関わりや中国の友人たちとの交友関係、さらには日本人の中国認識や宮島自身の中国観等が本篇の論述対象となる。宮島のアジア主義思想の変遷を辿り、それが中国語教育に及ぼした影響を考察する部分は要注目である。

第四章「結論」では、第一章から第三章までの内容を踏まえた上で、宮島が日本における中国語教育の流れの中で果たした役割を、教本と教育実践の両面から評価すると共に、今後の中国語教育について

も提言している。アジア主義者である父の薫陶を受けた明治初期の少年時代、尊敬する教師のもとで学んだ中国での青年時代、日本が中国進出政策に転じた頃の教師時代、満州事変を経て日中関係が激動する晩年に至るまで、宮島が生きた時代には大きな環境変化が伴う。その中で彼は一貫して中国語教育者としての生涯を全うしたのである。

そんな宮島大八の中国観と中国人への共感部分には、中国語教育において心すべき要素が含まれており、本論文は宮島大八によって培われた中国語教育の成果と意義をどのように生かせるかという課題にも向き合っている。そして中国語教育を通して相互理解を促進させる必要性を社会に向けて広く発信し続けるべきであるという提言に帰結するのである。

論文審査の結果はおおむね次の評価になった。

1　近代日本における中国語教育の現在に至る流れと、その中で宮島大八が果たした役割について丁寧に論述している。

2　第三章「宮島大八の思想背景」は、これまでの先行研究には見られない新たな切り口である。当時の外務省等の公開資料、新聞、宮島と交流のあった人々の回顧録や日記等を正確に読み取り、宮島大八の中国観や中国人観にスポットを当てた試みは注目に値する。

3　宮島が著した代表作以外の教本（『官話輯要』『支那語独習書』『官話篇』『支那語会話篇』）について紹介し、分析している点も評価される。更に今後のより深い分析と研究に大いに期待できる。

一方、 宮島大八の人物像についての掘り下げが不十分、焦点が漠然としている等の指摘もあったが、175頁に及ぶ本論文に具現化された適確な研究手法と高い調査能力、そして論述の正確さ、明快な文章表現が、結果として高い綜合評価をもたらした。

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上